


特定非営利活動法人 日本免疫学会
2025 年度 後期 Tadamitsu Kishimoto International Travel Award
研究発表報告書

申請者氏名	田井 優貴	会員番号	0035635	
申請者の所属・職名	大阪大学 感染症総合教育研究拠点 生体応答学チーム 特任助教			
出席会議名	Keystone Symposia: B Cells and Plasma Cells: Fundamental and Translational Biology			
発表論文タイトル	IgG1-driven positive selection into bone marrow plasma cells is mediated by differential antigen presentation and signaling through BCR			

実施結果

この度は、2025 年度後期 Tadamitsu Kishimoto International Travel Award に採択いただき、心より御礼申し上げます。

本 Travel Award のご支援のもと、私は、2026 年 3 月 16 日～20 日に米国コロラド州キーストンで開催された Keystone Symposia B Cells and Plasma Cells: Fundamental and Translational Biology に参加いたしました。本学会は、B 細胞およびプラズマ細胞の分化、記憶応答、抗体産生、疾患病態における役割について、基礎免疫学からトランスレーショナル研究まで幅広く議論する国際会議でした。また、“B and T Cell Collaboration in Lymphoid and Nonlymphoid Microenvironments” との合同開催であったため、B 細胞内在性の制御機構に加え、多角的な視点から液性免疫応答を理解する大変貴重な機会となりました。

私は本学会において、現在リバイス中のプロジェクトである胚中心反応後に産生されるプラズマ細胞の分化・維持機構に関する研究成果をポスター発表いたしました。特に、抗原特異的 B 細胞が IgM または IgG1 プラズマ細胞へと分化した後、脾臓および骨髄における長期生存プラズマ細胞としての運命がどのように異なるのかに着目し、複数の観点から解析した結果について報告しました。

ポスター発表では、多くの質問や助言をいただきました。特に、抗体クラスの違いがプラズマ細胞の生存性や組織移行能にどのように影響するのか、また胚中心内での選択過程と骨髄長期生存プラズマ細胞の形成がどのように連続しているのかについて、有意義な議論を行うことができました。これらの議論を通じて、自身の研究結果の意義をより明確にするとともに、今後追加すべき実験や論文中で強調すべき点について多くの示唆を得ることができました。

また、これまで何報も論文を読んだことのある著名な研究者がメモを取りながらポスターの説明を熱心に聞いてくださったり、同年代の研究者数人と意見交換ができたりととても刺激を受けました。

今回の学会参加を通じて、B 細胞およびプラズマ細胞研究の最前線に触れるとともに、自身の研究成果を国際的な場で発信し、多くの建設的な意見を得ることができました。本学会で得られた知見と議論を今後の研究に反映させ、液性免疫応答および長期生存プラズマ細胞形成機構の理解に貢献できるよう、さらに研究を発展させていきたいと考えております。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださいました岸本忠三先生、日本免疫学会ならびに選考委員の先生方、そして推薦いただいた黒崎知博先生に深く感謝申し上げます。

注) 本参加記は手書きでなく、Word を使用して作成してください。